

優秀修士論文概要

近代日記体小説の研究

石川 かれん

本修士論文は近代日本文学における日記体の小説を体系化すること、及び近代日本文学における文章表現の有り様を明らかにすることを目的とした論考である。いわゆる「日記体小説」はこれまで、山口直孝「『クロード・アスの日記』論——敵対する日記^①」や安藤宏「日記体小説をめぐって——太宰治「正義と微笑」を視点を^②」等の先行研究で取り上げられてきた。いずれも重要な指摘である一方、既存の研究はほとんどが作家研究の枠組みの中でひとつの作品を検討したもので、作家や時代を跨ぐ複数の小説を系統立てて論じたものはない。本修士論文はこの課題に対し、作家横断的な研究で取り組んだ。紙幅の都合上時代は明治期に絞ったが、今後の展開として大正期及び昭和期を射程に収めている。

はじめに「序にかえて——水野葉舟『日記文』から考える日記と日記体小説」として水野葉舟の日記文範書『日記文』（明治四十三年十一月 文栄閣）を視座に同時代の日記と日記体の小説を検討した。水野葉舟は日記指南書を複数出しているが、明治四十三年の『日記文』は最も古いものである。また水野は同時期に複数の日記体の小説を発表しており、その言説は日記と小説の関連を考える上で検討すべきである。ここでは、『日記文』が主張する日記のドキュメンタリーとしての価値が、フィクションである日記体の小説においては見出すことができないことから、日記と日記体の展

小説が似て非なる表現であることを論じた。

第一章では「国木田独歩『酒中日記』論——「過去」との訣別」として、国木田独歩の短編小説「酒中日記」（『文藝界』明治三十五年十一月）を視座に、日記筆者が日記に過去を書くこと、すなわち付された日付とは時間的に隔たれた事柄について日記に書くことに關して、記憶の想起や書く空間と書かれる空間の乖離を踏まえて論じた。過去の出来事を日記に書くことで日記筆者は過去を再体験することになり、過去は既に失われたものとしての側面を強調することになる。その結果として、過去を葬り去るために日記を記し始めたはずの日記筆者は現前した過去に飲み込まれて死亡する。過去の事件を回想して書く形式の中で、書く現在の時空間を曖昧にすることができる回想体や手記体と異なり、日記体の小説は日付を明示する以上、現在と過去の差異を露呈させずにはいられないことを論じた。

第二章では、「水野葉舟「北村の日記」論——日記と付記のディスクリル」として水野葉舟の短編小説「北村の日記」（『趣味』明治四十一年八月）を視座に、前書きとして日記文の前に置かれた付記の構造を論じた。日記に二人の女性をめぐる日記筆者の煩悶と事件が、個人を特定することのできる固有名詞を含め記されている故に、日記を公開した場合には筆者の醜聞を世間へ晒すことになり得る。このことを踏まえれば、日記の原本を所持していると主張する付記の筆者の位相が重要である。付記の筆者は繰り返し自分が北村の特別な友人であることを主張するが、付記の内容は北村の行為の弁護や擁護としては不十分である。また日記の本文に関しても、付記の筆者によって編集及び再構成されている。すなわち、日記を公開することは日記筆者の醜聞を公表することになりかねない。また公表したという点で北村と「自分」の「友情」で結ばれた共同体が破壊される、という問題がある。「北村の日記」は日記体の小説において、日記を公開する危険性と日記紹介者の特権性を露わにするテキストであることを論じた。

第三章では、「ゴーゴリ作二葉亭四迷訳『狂人日記』論——西欧文学との比較」として、二葉亭訳の「狂人日記」〔趣味〕第二卷第三号（明治四十年三月一日）、第二卷第四号（明治四十年四月一日）、第二卷第五号（明治四十年五月一日）全三回。の検討を行った。ここでは、ツルゲーネフを原典とする小栗風葉「へそ日記」〔新小説〕明治三十六年五月）において、原典に存在しない要素、具体的には日記を書くことと自己修養の関連性が追加されていることや、「狂」った人物として日記筆者が造形されるという点で「狂人日記」と共通する独歩の「酒中日記」では死亡する日記筆者が「狂人日記」では生存していること等を比較対象に挙げながら、日本の日記と日記体の小説には筆者の自己修練が要求されることを確認した。

日記に書く自己の非理性的な振る舞いを筆者自身が許容できないがゆえに、日本の日記体の小説において「狂」人となった日記筆者は日記を放棄し死亡することになる。一方、二葉亭訳の「狂人日記」においては、日記筆者が自身「狂人」であることを半ば認識しつつも、なお生き残るために「狂人」の存在し得る空間として日記を書き続けてゆくという点に日本の日記体との差異を見出している。

第四章では「徳田秋聲『隣の医師』論——明治四十年代の日記体小説再考」として、これまで秋聲の身辺テクストとして受容されてきた短編小説「隣の医師」を視座に、感情や精神的な興奮の表現を排し事実の記録に重点を置く種類の日記体の小説を論じた。同時期の日記体の小説では日記筆者の精神性や思想を重視するものが多数を占めるという点で「隣の医師」は特異なテクストといえる。一方、同時代の日記に関して、いずれも明治四十一年に出版された作家の日記である国木田独歩『欺かざるの記』と尾崎紅葉『十千萬堂日録』をめぐる同時代言説を参照すれば、記録性を重視するものが明らかに高く評価されることが確認できる。その意味で「隣の医師」は本来の日記に近い記述内容を持つ日記体の小説として位置付ける

ことができる。「隣の医師」タイプの日記体の小説の発展を模索することは、日記体の小説の幅を広げる可能性となり得たことを論じた。

本修士論文は書くという行為自体の顕在化を果たす形式として日記体の小説を定義することができたが、一方で単に日記体の小説の各論を累積してゆくだけでは、日記体の小説と書くことの研究を推進するに不足することも明らかにした。個別のテクストを論じる過程で発見できるのは、個別のテクストにおける日記筆者の書くこととそれにまつわる行為と思想であって、全ての日記体の小説あるいは日記筆者に共通する思想等を体系化することはできないからである。例えば、明治期の日記体小説において、作家あるいは文学青年として造形される日記筆者が精神的な煩悶を記す型のテクストがしばしば出現する、というような傾向を指摘することはできる。しかし、ある型が一つの典型とされることで本稿において扱った「隣の医師」のような例外的なテクストは顧みられなくなる。むしろ内容的に体系化したり一般化したりできないところに個別の日記筆者を前提とする日記体の小説の価値があるので、個別の作品論を累積することに一定の意義はあるものの、それだけでは十分な成果を期待することが出来ない。故に、今後の研究展望として、終章で次の可能性を示した。

第一に、身辺小説や自己表象テクストの研究領域との接続である。大正期以降、日記体は身辺小説や心境小説、作家の身辺記事や後に私小説と呼ばれる類のテクストと接続される。記述内容の真偽、すなわち日記筆者が実在の人物をモデルとしているか否かではなく、実在のモデルが存在する前提の元で受容された側面から、日記体の小説は身辺記事へ吸収されたいえる。ゆえに身辺小説や自己表象テクストの研究領域と接続して研究を進める必要がある。

第二に、本論考でも扱った水野葉舟とその仕事への注目である。水野は日記に限っても『日記文』以降大正五年に『日記のつけ方』、大正六年に

『模範の日記文』を出版している他、書簡文や小品等様々な文範を発表しており、一人の作家による纏まった仕事として検討する必要がある。また水野は日記体の小説の他に書簡体小説や小品文の発表も複数あり、それらのテキストと照応する可能性も残されている。

第三に、文学史上における自然主義との関連である。例えば、自然主義の盟主と見做すことのできる田山花袋は自らが編集主任を務めた『文章世界』の紙面を中心に繰り返し作文法に関する記事を執筆、掲載している。明治四十四年四月十五日の『文章世界』は「文章の研究と作法」という特集の組まれた増刊号であり、そこでは日記文、書簡文に加え紀行文、抒情文等の作法が解説されている。本特集は単なる作文法の提示に留まらず同時代に流布していたテキストを例に挙げながら解説をしている部分に特徴があり、その観点から実際に発表されたテキストと作文法を照応させて考える時の視座となるだろう。言うまでもなくこの時期の『文章世界』は花袋を中心とする文学空間、今日において自然主義と呼称される作家とその周辺の言説を主に取り込んでいるためにその枠組みから外れる記事をしばしば取りこぼしている。しかし大正期以降の文学テキストが自然主義的なものの存在を前提としていることを踏まえれば、日本における自然主義派とその活動場所は近代文学の仮想敵とその牙城として捉えることができよう。その意味で日記を含む作文法を考える時、自然主義とその周辺の作家を対象とすることには必然性がある。

注

- (1) 山口直孝『私』を語る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出發期——(二〇一一年三月 翰林書房)
- (2) 『国文学——解釈と教材の研究——』平成八年二月号

優秀修士論文概要

探偵小説雑誌『宝石』の一九四六年

ベント 勇亮ヘンリー

本修士論文は、探偵小説雑誌『宝石』の創刊年である一九四六年に着目し、その誌面に捉えられた同時代言説の分析を通して、敗戦直後の日本における言説空間の編成の一端を探偵小説雑誌という大衆的なメディアから再考したものである。

従来の探偵小説研究でも指摘されているように、探偵小説には犯行動機やトリックといった作品の構成要素に同時代の社会状況が影響する場合がある。本論文ではそうした探偵小説の性質と、占領初期の極めて早い時期から探偵小説が大衆に広く人気を博していたことに着目し、その流行の中心的存在であった『宝石』を対象とした。また、極めて高い発行部数を誇った創刊年の『宝石』の誌面は、江戸川乱歩や横溝正史をはじめとした戦前からの既成作家によって構成されており、敗戦後に確立した新興メディアでありながらも、戦前・戦中の延長線上に位置づけられる側面も持ち合わせていた。本論文ではそうした創刊年の『宝石』の性質にも目を向け、新興メディアとしての『宝石』と、そこに集った既成作家による作品の双方の視点から、一九四六年の『宝石』が捉えた敗戦直後の言説空間の多角的な考察を試みた。

第一章「『宝石』創刊年にみる探偵小説メディアとしての形成」では、「サ

ロン放談」「探偵小説壇」「宝石函」の三コーナーを中心に、一九四六年の『宝石』に掲載された評論や随想を取り上げ、そのメディア形成におけるGHQ/SCAP (General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers、連合国軍最高司令官総司令部。以下、GHQ) と米国の影響と、民主化をめぐる同時代言説について論じた。

創刊年の『宝石』では、より推理の面を重視する本格探偵小説を求める傾向にあり、大衆に広く親しまれるジャンルイメージの確立を試みた。幅広い読者層を持つ米国での探偵小説受容の形態はその理想像として度々言及され、GHQ大尉を招いた座談会を開催するなど、占領下にあった同時代状況を利用した積極的な情報収集が行われていたことが確認できる。一方のGHQも、自国の大衆文化との共通性が高く、民主主義的な文化として認識されていた探偵小説を通して民主主義の浸透を図った形跡がみられ、『宝石』とGHQとの間にはある種の相互利用的関係性が存在していたと考えられる。

こうした考察を踏まえ、本章では、創刊年の『宝石』が、米国を範に取った健全かつ文化的な本格探偵小説という方針を定めることで、GHQ主導で民主化が進められた敗戦直後の言説空間の中に探偵小説を位置付けようとしたと結論付けた。しかし、創刊年の『宝石』では、戦前に不健全というレッテルを貼られた変格探偵小説の再掲や、戦時下で人気を博した捕物帳の特集が散見され、それらの企画が読者の大きな反響を呼んでいた事実も見逃すことはできない。

続く第二章以降では、既成作家による同時代を題材とした具体的な作品の分析を通して、彼らが一九四六年の『宝石』の誌面上に捉えた同時代言説の性質について考察した。

第二章「水谷準「ウイルソン夫人の化粧室」論」では、水谷準による短

篇「ウイルソン夫人の化粧室」(『宝石』一九四六年四月)を取り上げ、作中に描かれた敗戦と占領にまつわる同時代言説について論じた。

日本人の「私」が、幼少期に友人である米国人のデニイの家で「真珠の首飾」を盗んだことを、敗戦後に占領軍の将校として再び日本を訪れた彼に打ち明けて謝罪するという寓話的な作品構造からは、占領期日本においてGHQ民間情報教育局が展開した、戦争に対する罪の意識を日本に広く根付かせる「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の顕著な影響がみられた。しかし、デニイが快く「私」の罪を赦すという結末は、作品発表翌月に開廷した極東国際軍事裁判を通して裁かれた日本の実態とは大きくかけ離れたものであった。

本章では、敗戦直後の日本社会に存在した、敗戦と占領の事実に対する樂觀的な言説と、作者である水谷が公職追放の指定を受けていたことに着目し、その二つの事象が組み合わさることで、許されるだろうという希望的観測に基づく結末部の表象が生み出されたと考察した。その考察を踏まえ、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の影響と占領に対する樂觀的な態度が併存する「ウイルソン夫人の化粧室」は、段階的な変化の途中にあった占領初期の米国観と、敗戦・占領をめぐる言説の形成を捉えた作品であると結論付けた。

第三章「丘丘十郎「蜂矢風子探偵簿」論」では、海野十三が丘丘十郎の筆名で形成した連作短篇小説「蜂矢風子探偵簿」(『沈香事件』『宝石』一九四六年五月／『妻の艶書』『宝石』一九四六年七月)を取り上げ、作中に描かれた女性の社会進出にまつわる同時代言説について論じた。

敗戦直後の日本では、一九四六年に誕生した女性議員や女性警官をはじめ、女性の社会進出に対する関心が高まっていた。「蜂矢風子探偵簿」でも、当時の最新の流行に身を包み、若くして自身の探偵事務所を構える女性探

偵の蜂矢風子が「新時代の日本女性」と称されている。しかし、作中で描かれたその実態は極めて非力な存在であり、作者の海野が戦前・戦中に執筆した作品に登場する女性探偵同様に、封建的な性質を帯びていた。

本章では、女性の社会進出がメディアで扱われる一方で、男性の復職や国の失業対策によって女性労働者が職域から追いやられていた同時代状況に着目し、そのねじれた言説空間が、蜂矢風子の人物像の形成に大きく影響を与えたと考察した。その考察を踏まえ、「蜂矢風子探偵簿」は、恣意的に形成された「新時代の日本女性」言説の影で、その否定と、封建的な女性像への回帰が行われた同時代の言説空間の矛盾を捉えた作品であると結論付けた。

第四章「渡辺啓助「盲目人魚」論」では、渡辺啓助の「盲目人魚」(『宝石』一九四六年一〇―十一月)を取り上げ、作中に描かれた復員兵にまつわる同時代言説について論じた。

敗戦直後の日本では、大規模な復員に伴い、生活難に苦しむ復員兵の存在が大きな社会問題となりつつあった。「盲目人魚」では、復員兵を一つのカテゴライズされた存在と捉えずに、その下にある個々人の人物像に迫る表象がみられた。この表象形態は、作者の渡辺が戦時下で発表した「ますらを工房」(『科学と国防 譚海』一九四二年五月)にみられる傷痍軍人表象と共通しており、復員兵に対する偏見を克服する動きが指摘できた。しかし、同時に、敗戦後の復員兵を取り巻いた困難の実態が多く見落とされている一面もみられた。

本章では、近親者をはじめとした復員兵の当事者であるか否かによって彼らを迎え入れる態度が大きく異なっていた同時代状況に着目し、当事者でない「私」によって語られる「盲目人魚」では、復員兵をめぐる事件が一過性の出来事として処理されていると考察した。その考察を踏まえ、後

年の探偵小説に散見される一族の崩壊を象徴する復員兵像とは異なる復員兵の姿を描いた「盲目人魚」は、復員兵の存在が種々雑多な社会混乱の一事象として処理されていた敗戦直後の言説空間の実情を捉えた作品であると結論付けた。

終章では、各章の結論を踏まえ、一九四六年の『宝石』の誌面から浮かび上がる敗戦直後の言説空間の様相について論じた。

創刊年の『宝石』は、民主化に基づいた言説空間の再編成と密接に連動し、本格探偵小説による健全な探偵小説文化の確立という目標に向けたメディア形成を行った。しかし、その一方で、依然として高い人気を誇った捕物帳や変格探偵小説もメディア戦略の一環として用いる傾向もみられた。本論文で扱った既成作家による三作品も、敗戦直後の言説空間の再編成に伴う社会変化をアクチュアルな題材とし、新たな概念や価値基準を作品内に取り入れる動きを見せた。しかし、「ウィルソン夫人の化粧室」では敗戦と占領の実態を楽観視する結末、「蜂矢風子探偵簿」では封建的な女性像への回帰、「盲目人魚」では戦時下の傷痍軍人表象との結びつきが指摘でき、いずれの作品にも、戦前・戦中における概念や価値基準へと帰結する傾向がみられた。

こうした傾向を踏まえ、一九四六年の『宝石』では、敗戦と占領に伴う価値基準の変容の中で戦前・戦中と連続する言説空間が再編成される段階的な変化の序幕を捉えていると結論付けた。

本論文では、各章での考察を通し、明確な痕跡とともに敗戦直後の段階的な言説形成の一端を提示することができた。また、ともすれば乱歩個人の動向に集中する傾向にある敗戦直後の日本社会と日本探偵小説界のかかわりを多少なりとも異なった視点から捉えなおしたことで、占領期研究と

日本探偵小説研究の接続可能性も改めて提起した。しかしながら、本論文で扱った対象は極めて限定的なものであった。今後の研究では、本論文を足掛かりにその対象を一九四七年以降の『宝石』へと広げることで、占領期日本における言説空間の再編成について議論を深め、その段階的な変化の明確化を試みる。

優秀修士論文概要

安部公房の中期作品研究

山西 将 矢

本修士論文は安部公房の中期作品を論じることが目的である。

安部の活動期間を区切るにおいて、デビューから『砂の女』(一九六二)までを前期、『他人の顔』(一九六四)から『燃えつきた地図』(一九六七)までを中期、『箱男』(一九七三)から死までを後期としている。『燃えつきた地図』から『箱男』発表までの期間は演劇活動に重点を置いて長編を執筆することがなかったこともあり、中期と後期を繋ぐ過渡期と捉えることにする。

本修士論文は作品論を四本、その前後に序章と終章を置く全六章で構成されている。各論の概要は以下の通りである。

序章では研究史を紐解き中期作品を論じる意義を明らかにした。

第一章では『他人の顔』(一九六四)について論じた。先行研究において類似性は指摘されながらも詳細に比較されることがなく、また重要性を認識されることもなく見過ごされてきたマルセル・エイメ『第二の顔』との関係を明らかにした。『他人の顔』における「顔」の問題は『第二の顔』からヒントを得て着想されたものとし、具体的にどのような影響を受けたのかを調査した。また周囲の人間から排除される主人公と作中登場するマイノリティの問題はH・G・ウェルズ『透明人間』から借用された「見ること」の暴力性と切り離せないものであるとし、安部自身の発言を参照

しながら論証した。最後に、それらがどのように『他人の顔』で提起された隣人と他人の問題と関わっているのかを確認して、後の作品を論じる際の指針になるべく整理した。

第二章では『榎本武揚』(一九六五)について論じた。先行研究が安部自身の転向と重なる読解と北海道文学として考える読解の二つに分離していることから、その両者を繋ぐ読解を目指した。具体的には、転向小説ではないという安部の発言と照らし合わせて、中期のテーマである他人の問題が描かれた作品として論じ、その際に、北海道という場所が重要な役割を担っていることを指摘した。また、同時代の転向に関する言説を調査し、安部が意識した可能性のある資料を示した。

第三章では『人間そっくり』(一九六七)について論じた。ジャック・フィニイ『盗まれた街』とフレドリック・ブラウン『火星人ゴー・ホーム』から影響を受けていることを明らかにし、その結果得た成果をもとに作中登場する「火星人」の役割を検討した。また、従来は見落とされてきたが、作品の舞台が団地であることから同時代の団地に関する言説を参照し、団地で物語が進行する必然性を提示した。それにより、『人間そっくり』がエッセイ「モスクワとニューヨーク」と密接に関係していることが理解できた。

第四章では『燃えつきた地図』(一九六七)について論じた。従来の研究では見落とされてきた典拠となる作品群との関係を、文章表現レベルで比較することで実証的に明らかにした点に本論文の新規性がある。具体的には、安部が本作を書くときにアラン・ロブリーグリエ『消しゴム』と『迷路のなかで』、ミシェル・ビュトール『時間割』を参考にし、舞台となる都市の描写、登場人物が記憶喪失になる結末、題名の由来となる燃える地図の表現、その他細部を自作に転用したことがわかった。また作中登場するピカソの絵画が都市を生きる人間の暗喩となっていることに注目し、テ

クスト読解を行った。これらアンチ・ロマンと呼ばれる作品への接近が、安部の創作テーマと切り離せないことを安部自身の発言や先行研究、同時代の言説から導き出し、従来の小説を破壊するような形式が『燃えつきた地図』を書くためには不可欠であったのだと結論した。

終章ではこれまでの概括を行い、後期作品を論じる視座を示した。

以上のように、本修士論文は安部公房の中期作品を分析し、後期作品を論じるための筋道を提起することを目的としている。